

ちば里山新聞

(第65号)
 編集発行 NPO 法人ちば里山センター
 袖ヶ浦市長浦拓2号 580-148
 ☎ 0438-62-8895
 題 字 倉島 貴浩
 (ワークホーム里山の仲間たち)

チェーンソー作業リーダー育成講座「岡部塾」全7回中5回終了

今年度の岡部塾はベーシックコース5名、アドバンスコース4名の受講で、会場はすべて袖ヶ浦市椎の森です。第1回は11月20日(日)に開催されました。まず初めに岡部講師より安全装具の必要性について、次にチェーンソー目立てについての講義がありました。目立てについては追いつル切りを多用するのでデブスが重要なポイントになることの説明がありました。午後からはコナラの大径木を講師のデモンストレーションにて伐倒し、その伐倒木を受講生により玉切りや突っ込み切りの練習をして終了しました。



根張りの大きいムクノキ

第2回は12月4日(日)に開催されました。今回は椎の森里山会の依頼により、杉の植林予定地にある大きなムクノキの伐倒です。伐倒する前にロープワークにて伐倒方向を決め、より安全を確保しました。ムクノキは末広がりの根張りがあり、受口を作るのにも苦労しましたが安全に伐倒することが出来ました。ロープワークで使用する機材(ロープ、カラビナ、滑車、プルーシックコード)等の強度は荷重の倍以上必要であることを認識して使用することが大事とのことでした。

第3回は12月18日(日)に開催されました。今回は伐倒の邪魔になる斜めに傾いたスタジイですが、伐倒中に裂けやすい樹種なので、突っ込み切りにて追いつルを作り伐倒をしました。次に本命の二股になったナラ枯れ大径木をロープワークにて伐倒方向を誘引し、受口を伐倒時に株に乗りにくいオープンフェイスカットを作り安全に伐倒しました。



ダブルノッチ後ロープ牽引

第4回は1月15日(日)に開催されました。今回はベーシック5名の全受講生がアドバンス講習生の指導見守る中、自分で選んだナラ枯れの木を伐倒しました。今までの岡部塾にて伐倒したカシノナガキクイムシの被害木は外周の辺材部分は腐巧がかなり進んでいるので、中心の赤身部分が木の太さとみて、受け口は赤身部分まで入れてツルを赤身部分に残し、ロープワークを使うことにより安全な伐倒が出来ることを学習しました。

第5回は1月29日(日)に開催されました。今回は掛かり木処理で危険な元切りではなく、安全な高さでオープンフェイスカットにてノッチを作り、カット部分の少し上をロープ牽引にて安全に処理する方法を学びました。次にその応用として、先の台風被害で倒れ斜めに掛かった木は元部分と上の部分の2箇所ノッチを作り、ロープ牽引にて安全に伐倒出来ることを学びました。

特別追加講習として3月11日(日)ロープスプライシングをおこない、ウーピースリング(木の太さに合わせて長さ調整が出来る便利なスリング)とプルーシックコード(ロープの牽引位置をスライド出来るコード)の完成を目指しました。岡部講師手製のロープスプライス工具を使い、全員スムーズに作成出来ました。



チェーンソー目立ての基本



ロープワークでの伐倒



ウーピースリングの作成

東葛地域里山団体意見交換会が開催される！

〃 きっかけづくりなど、後継者へつなげる課題を共通課題へ 〃

3月17日(金)松戸市民会館201会議室で東葛地域里山団体意見交流会を行いました。

東葛地域の松戸市、柏市、船橋市、市川市、鎌ヶ谷市、八千代市の22団体から30名が集まりました。活動する森の紹介と、抱えている課題の披露が中心になりました。午後4時から午後6時の短い時間で言い尽くせない部分もあったと推測しますが、意見交流会の第2回、第3回に期待したいとの声もあり、次へつなげていきたいところです。

ちば里山センターでは里山カレッジを毎年実施しています。来年度からこの里山カレッジについて、県内を千葉市より西の地域(東葛地域)、千葉市以北の地域(北部地域)、市原～茂原以南の地域(南部地域)に分け、それぞれの地域色を生かしてカレッジを開催する方針としました。

東葛地域の多くの里山団体が後継者不足、会員の高齢化などに伴う安全な作業のための資質向上、ナラ枯れ被害木の処理など共通の問題を抱えていると認識していますが、各団体が抱えている問題を向き合っとうことで、東葛地域の団体が抱えている問題に対する認識を深化させることができ、これにより地域色を生かした里山カレッジが開催できると考えました。

各団体を個別訪問し、活動現場で話を伺うのが望ましいところですが、東葛地域のなるべく多くの里山団体の方々に集まっていただき、それぞれの団体の活動や運営の現状、問題点などを伺う、市域の枠を越え里山センター会員にとらわれない東葛地域全体の交流会を開いてはどうかという相談を各団体に持ち掛け、実現に至りました。

各団体に共通するのは都市部の樹林地で比較的都心に近いというところ。里山といっても、住宅地の隙間、工業地帯の空き空間など取り残されたように残った樹林地、それぞれの特徴があることが分かりました。

参加した団体のほとんどで抱えていることとして、里山活動を担うボランティアの年齢が高くなり、後継者につながらないなどの悩みを抱えていることが明らかになりました。

参加した30代～50代の若い世代から、「すでに活動している団体に若い世代は入りにくい」、「イベントを仕掛け、人を呼んでどうか」と既存の団体に参加しやすいような、きっかけづくりを意識してほしいという意見がありました。

加えて、現役世代が参加しやすいような気持ちになりやすい「里山サポーターズ制度をつくる」、「活動日を流動的にして、関わりやすい仕組みを作る」といった意見が出ました。

一方、「森が魅力的なのはわかる。何をやればよいのか、わからない」、「入りづらい、違和感がある」といった各市で行われているボランティア入門講座をフォローアップするような仕組みづくり、SNSを利用した発信力の向上も重要であることが指摘されました。

いくつかの団体では近所の幼稚園、保育園、小学校、中学校との交流、授業の一環として森に入る事例が紹介され、きっかけづくりが進んでいる様子も紹介されました

「緑のネットワーク・まつど」代表 藤田隆



東葛地域団体意見交換会の様子

今年もオープンフォレスト in 松戸が開催されます

期間：5月13日(土)～21日(日) 松戸にある19の森があなたを待っています！

里山じまん ⑫

NPO 法人 やたむざい 谷田武西の原っぱと森の会

フィールドは印西市武西、白井市谷田に広がる里山の市有地です。千葉ニュータウンの開発から除外されて、県有地として、県が管理のために草刈りをして維持していましたが、市民からの要望強く、印西市と白井市が環境保全を目的に千葉県から譲渡を受けました。ニュータウンの都市の街並みが広がる中、昔の里山の景観が残されています。

里山には湧水が潤す谷津が4筋あり、きれいな水が台地から浸みだして、印旛沼流域の生態系を支えています。台地には原っぱと樹林地がモザイク状につながり、多彩な環境に多様な生きものが、互いに絡み合いながら命をつないでいます。



里山学校 (菌根菌と樹林の草花調べ)

江戸時代まで野馬を放牧していた広大な小金牧の一部である印西牧があった場所でもあり、牧の原っぱの植物は今も花を咲かせて、昆虫が訪花し花粉を運んでいきます。

昔は馬が集落に入らないように二重の野馬除け土手が作られました。開発により、千葉県の野馬除け土手は崩されていきましたが、ここには今も二本の谷津の谷頭を結んで伸びており、両端の谷頭には泉が湧き出ています。その一つ、澤山の泉には祠が祀られて、木々の中の湿地にたたずんでいます。

谷田・武西の里山は生物多様性からも、歴史的にも大変貴重な場所です。原っぱの会は、人の手が入ることで維持されてきた里山の環境を、保全作業という形で守っています。また、自然の恵みを体感できるような散策の案内や小学校・幼稚園の体験サポートなどを行っています。

活動の様子はホームページでもご覧になれます。会員募集中です。

- ・連絡先: ymharappa@yahoo.co.jp
- ・ホームページ: <http://harappanokai.web.fc2.com>

NPO 法人矢田部西の原っぱと森の会理事長 矢野眞理



東邦大学の皆さんと一緒に大きな原っぱの集草作業



原っぱと樹林の秋を見つけて

千葉県内で採種した多様な広葉樹のコンテナ容器による育苗試験

昨秋に多くの団体に協力いただき多くの広葉樹種子を集めたことは、前回の里山新聞で報告したところですが、この春、市原市の個人宅の庭で4月2日に、袖ヶ浦市の椎の森里山会が管理する場所で4月12日に播種しました。育苗箱に春まで保存した種を播種し、個人宅の庭では地面に埋め、椎の森では湧水が溜りやすい場所に置きました。これは播種箱の中の土を乾燥させないためです。秋に種子を採取してからこの春まで保存しておいたのですが、種子が劣化せずに発芽するのかが気になるのですが、早い樹種では播種後2週間で発芽が始まりました。今後、発芽した樹種を適宜コンテナ容器に移植して、個人宅の庭先などで育苗する予定です。



育苗箱設置 (椎の森)



育苗箱に播種

なお、この育苗試験は森林インストラクターと椎の森里山会のみなさんの協力を得て進めています。

ちば里山センター 遠藤良太

久留里駅前の「伝統黒文字楊枝館」を訪問

かねてからの念願で、きさらず里山の会柴崎さんの案内により君津市久留里駅前にある「伝統黒文字楊枝館」を訪問しました。路地を少し奥まったところにあり、中に入ると黒文字楊枝伝承会白熊会長をはじめ、数人の方がクロモジ楊枝の製作に



黒文字楊枝伝承会白熊会長

励んでいました。江戸時代より武士の内職として始まったと言われる久留里の黒文字楊枝は「雨城楊枝」とも呼ばれ、明治、大正、昭和と進化を遂げてきました。クロモジはクスノキ科ということもあり殺菌作用、香りが良いこともあり和菓子を頂く時の楊枝として使われています。楊枝の細工も色々あり、松、のし、鉄砲、うなぎなどいろいろな模様をつけたものがあり、その技は「千葉県指定伝統的工芸品」に選ばれています。

材料のクロモジは成長の止まった10~3月に切り出し、半月から1か月ほど乾燥したのものを作る楊枝に

合わせて割り出します。割った黒文字は樹皮部分を残し、小刀で断面が正方形になるように切り出します。削りだしには細心の注意が必要で、小刀は親指と人差し指で挟み、体全体で押し出すように一気に削り出すのがコツだそうです。これがなかなか難しく、すぐに小刀の上に指が乗ったり、脇が開いたりしてしまいます。こればかりは修行あるのみと感じました。特にのし楊枝は紙より薄いくらいに削り出す必要がありますが、最後



楊枝を作る道具類

の結びが一番むずかしいようです。白熊会長より与えられた課題である黒文字楊枝の削り出しをしていると、あっという間にお昼になり、隣にある中華喜楽でスペシャルラーメンを食べて午後2時まで頑張り、最後に色々な楊枝を頂き、お礼方々楊枝館を後にしました。



楊枝の削り出し



完成したのし形楊枝

里山の風にゆられて ㉑



クロモジ<黒文字>雄花 クスノキ科

クロモジは雌雄異株で雄花は写真のようにオシベが確認出来るが雌花は中心にメシベがあり囲うように花粉の出ないオシベの軸がある。クロモジはクスノキ科特有の香りが強いのでお茶、アロマオイル、楊枝などに利用される。

写真・文 赤松義雄 R5.3.16 袖ヶ浦市神納



つれづれごと

春爛漫と浮かれていたらいつの間にか夏へ◆スギ花粉に悩まされていたら今度は黄砂の襲来◆黄砂は中国の奥タクラマカン砂漠、ゴビ砂漠から偏西風に乗って北京→朝鮮→日本と襲ってくるようだが粒子が0.5~5μmとPM2.5と同じくらいなので細菌や花粉とくっ付きアレルギーを引き起こす◆しかし黄砂は土地を肥し、海のプランクトンを増やすという不思議なものだ(Y.A)

入会申し込み・問い合わせ先

特定非営利活動法人 ちば里山センター

〒299-0265 千葉県袖ヶ浦市長浦拓2号580-148 ☎0438-62-8895 FAX0438-62-8896(平日9:00~17:00)

E-mail info@chiba-satoyama.net ホームページ <http://chiba-satoyama.net/>